隣のクラスの海江田くん。

久遠 安樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隣のクラスの海江田くん。

【Ｎコード】
Ｎ８４８０Ｕ

【作者名】
久遠　安樹

【あらすじ】
顔よし、愛想よし、頭よし、運動神経よし。何もかも完璧で女子が憧れる“王子様”的存在な同級生の海江田くん。サッカーも上手で男子からも慕われている。そんな人気者の海江田くんと何の取り得もない私は、実は高校の入学式の時に一度だけ言葉を交わしたことがある。別にたいした話じゃなかった。なのに、私はあれから海江田くんにストーカーチックな被害を受けていた――。

カエダカズキくんとササキリサ

それは高校の入学式の時だった。
桜の花弁が幾つも私の目の前を横切っていく。
先ほどの校長先生の話によると、これでもまだ七分咲きらしい。
風に靡いて乱舞する桜の花弁と自分の髪に視界を邪魔されて、うっとおしいと感じた。

「ねぇ、君！」
肩をポンと叩かれ、はっとした。
髪を押さえながら振り返ると、無邪気な笑みを浮かべている男。
それが海江田和輝くんだった。

色素の薄い茶色の髪を風に靡かせるその姿はまるで白馬をつれた王子様のようだった。
でも、実際は彼は王子様でもなく、連れているのも白馬ではなく、自転車なんだけれど。
「これ落としたよ」
差し出されたのは確かに今朝ポケットに入れたはずの私のハンカチ。
亡くなった母が愛用していた桜の刺繍がされた薄桃色のそれはこの世に二つないものだ。
落とした事さえ、気づかなかった事に顔面を蒼白させた。
それと同時に彼に対して深い感謝を感じた。
「どうもありがとう。これ、大切なものなの」
笑顔を浮かべてハンカチを受け取って視線を送ったが、彼は茫然と私を見つめていた。

「な、何……？」
顔に何かついているのだろうか。
思わず手で頬を撫でてみたけれど、何かついている気配はなかった。
不快とまでは言わないが顔をジッと見つめられるのは気分が良いものではない。
照れ臭さと気まずさが入り混じり、この場に居辛く感じて――。
「あ、あの、本当にありがとう。じゃあ私、もう行くから……」
別れを告げると彼ははっと我にかえった。
「あ、うん。じゃあ……」
「さよなら」

この時は、彼とはもうこれっきりだと思っていた。
同じ学校だから廊下ですれ違ったりする事もあるだろうけど、きっともう話す事はないだろうと。

だけど私はそれから海江田くんに不審な行動をとられる様になる――。

私のスーパーヒーロー

7組の海江田和輝くんの話題で今日も皆は盛り上がっている――。
「昨日の試合、理沙も見に来たら良かったのに！海江田くんの蹴ったボールはね、まるで生きてるみたいにびゅんびゅん動くの。いやぁ、あれは相手高校の女子までも虜にしちゃってたな……。私も危なかった」
「ヨリ、彼氏いるじゃん……」
「冗談よ、冗談！」
友人である新田ヨリは昨日行われたサッカー部の試合の熱く語っていた。
でもサッカーの事なんてルールも知らない私はそんな熱心に話されても、相槌を打つことしかできなかった。
ふとクラスを見渡せば、クラスメイトの殆どが隣のクラスの海江田和輝くんの話題で喋っている。

男女、学年問わず大人気な海江田くんは言うまでもなく有名だから私も名前と顔くらいは知っている。
だけどヨリみたいにキャーキャー騒ぐ事は出来ない。

「佐々木」
名前を呼ばれて顔を上げると、クラスメイトの男の子が気怠そうに立っていた。
明後日の方向に向けられる目は決して私を見ようとはしない。
「何かこの席からどけ、って」
「は？何なのよ、それ」
私が口を開く前に、ヨリが不機嫌さを露にして食い掛かった。
確かにいきなり「どけ」って言われるのは意味が分からない。
顔全体に不快感を表しているヨリに、彼は苛立ったように声を荒げ

た。
「知らねぇよ！俺だってそう言えって言われたんだから！」
「……誰に？」
私が声を低くして訊ねるとクラスメイトの男の子はギョッとしたように目を剥いた。
怪しさ満載である。
「と、とにかく早くどけよ！！」
席から動かない私とヨリに彼は焦燥を見せた。
「気持ち悪っ。行こう、理沙」
クラスメイトの男の子を一瞥し、ヨリは椅子から立ち上がって私を促す。
私は辺りを警戒してから、教室を出て行こうとするヨリの後ろを慌てて追ったのだった。

教室から廊下への敷居を跨いだ瞬間、耳をつんざくような何かが壊れる激しい音が響いた。
それに思わず肩を震わせて、振り返る。
教室の窓ガラスが粉々に粉砕していた。
その傍にサッカーボールが落ちている事を見ると、どうやら外から飛んできたものらしい。
「……え、」
私はすぐに気づいた。
もしも、クラスメイトの男の子の忠告がなかったら粉々になったガラスを浴びていたのは私達だった。
幸い、怪我人は出ていないが、ガラスの欠片が散らばっている場所はさっきまで私が座っていた席だったのだ。

どこかから向けられる視線にはっとして辺りを見渡し――ガラスが割れた音に反応して沢山の生徒が、私のクラスである6組に押し寄せてくる中、静かにこちらを見ている人がいた。

７組の海江田和輝くんだ。
生徒の隙間の奥からまっすぐ私を見つめている。

ぞっとして全身に鳥肌がたった。
おそらくクラスメイトの男の子に「どけ」という伝言を託したのは
海江田くんだろう。
しばらく私と奇妙な視線を通わせていた彼は不意に視線を逸らすと
人混みに消えてしまった。

季節はずれの春が来たりて

海江田くんとは入学式以来、一度も声を交わした事がない。
なのに彼はこうやって度々誰かを使って私に危険を忠告してくるのだ。
海江田くんの言動の意図は分からないけれど、少し不気味さを感じる。
色素の薄いブラウンの瞳は私の心の奥の奥まで見透かしているようで――…。

「り、理沙！」
唐突にヨリから肩をばしばし叩かれ、私は痛みに顔をしかめた。
「な、何？」
ヨリは完全に今、野次馬殺到中の６組の教室ではなく、その反対方向を一点に見つめていた。
ヨリのその目の色は、彼女が海江田くんの話を必死に語っている時の目に似ている。
つられて私の目もヨリの視線を辿って行く。

その人が視界に入った瞬間、私の身体全身が震えた。恐怖からではない。
黒髪の伸ばされた襟足や着崩れた制服は決して卑下た妄想へ落とすことはなかった。
その人は友人らしき人と会話しながら笑顔を見せている。
「２年の春斗先輩だよね！？マジかっこいいんだけど！」
その人――春斗先輩が角を曲がって姿が見えなくなると、ヨリが興

奮気味に叫ぶ。
「うん！かっこいい！」
私も笑顔で同意した。
「知ってる？春斗先輩って“２年の海江田くん”って言われてるんだよ」
「えぇー。何それ。それなら海江田くんが“１年の春斗先輩”でしょ？」
ムッとしつつ、そう言い直すと途端にヨリから意地悪な笑みを向けられた。
完全に窓ガラスが割れた事等、頭から飛んでいた。

「やっぱり！春斗先輩が好きなんでしょ！？」
探るような眼差しがくすぐったくて、私の顔から笑みが消えることはなかった。
ヨリはやはりこういうのに敏感だ。
緩んでくる頬を思わず両手で押さえる。
「……んふっ」
隠しようがなかった。

黄昏時の背後にご注意

別に隠しているつもりでもなく、正直言えばまだ自分の気持ちにそこまで自信がなかった。
春斗先輩は一度も喋った事がないどころか、目も合わせた事がない。
ささやかで小さな私の恋心をヨリにカミングアウトすると、まるで彼女は自分の事のように張り切ってしまってずっと騒いでいる。
私はそんな友人の姿に失笑しつつ、生まれたばかりの恋心を温めていこうと強く思った。

「理沙、どうするの？」
テニス部のヨリはもうユニフォームに着替えてグラウンドに向かおうと下駄箱で靴を履いていた。
一方、制服姿の私は笑って、「今日は帰るね」と言い、ローファーに履き替えた。
「なんだ、先輩の練習見ていかないの？」
その言葉に思わず溜息を吐きたくなる。
「いいの。別に付き合いたいわけゃないから」
そう言い切ると私はヨリと別れて校門を出て行った。

9月だと言うのにまだ蝉が鳴いている。
容赦ない暑さの所為か、ずっと蝉の鳴き声を聞いていると頭が痛くなる。
自然と私の足の歩幅は小さくなり、目線は気がつけば街路樹の影を見つめていた。
差し込む夕日に私の影が長く伸びている。

「……」
ふと、ある違和感を感じて私は足を止めた。
空気の匂いを嗅ぐように、オレンジ色に染まっている空を見上げた。
何か、おかしい。
はっとして勢いよく振り返ったけれど、そこは街路樹の影が続いているだけで何もなかったし、何もいなかった。
前を向けば、数メートル先で作業着を着た中年の男がチェーンソーで一本の樹を切り倒そうとしていた。
きっと背後に感じた違和感は気のせいだろうと感じて、私はまた歩みを始めた。
だが、胸の中に溜まるしこりのような不快が消えてくれない。
ざっと風が街路樹を駆け抜けた。

背後からいきなり肩を捉まれて私はバランスを崩し、激しくアスファルトに尻餅をつく。
「いやぁ、すまんねぇ。怪我なかったかい？」
その声にはっと目を開けると、さっき街路樹のひとつをチェーンソーで切っていた中年の男が眉毛を八の字に下げながら慌ててこちらに向かってくる。
私の数歩先で大きな樹が横たわるように倒れていた。
背後から肩を捉まれなかったら、私はきっとこの樹の下敷きだったに違いない。
そう考えるとゾッと首筋が粟立った。

「立てる？」
背後から気遣う言葉が聞こえてきて、私はその人物に感謝いっぱいになる。
「危ないところ、助けていただきありがとうございます」
自力で立ち上がって身体を反転させ――私は思わず目を疑った。

どうしてこの人が、ここにいるんだろう。

「海江田……くん……！？」

ご時世、非科学的な事があるわけがない

「大丈夫？怪我してない？」
私は馬鹿みたいに大口を開けて、海江田くんを凝視した。
相変わらず彼は爽やかに色素の薄いブラウンの髪を風に靡かせている。
緊張の為か。恐怖の為か。私の鼓動は容赦なく高鳴っていた。
「どうしたの？」
無害な笑顔を向けられて私はますます困惑したのだった。
「どうしたのって……。こっちの台詞よ」
ごもごもと口ごもりながら呟くと、海江田くんは笑みを深めて私の頭に付いていた葉を取ってくれる。
――何なんだ、この漫画みたいな状況は。
全く私には似合わな過ぎて嘔吐したくなってくる。

「葉っぱ。たぬきみたいだよ」
……はぁ？
心の底から海江田くんを馬鹿にした言葉が口を突いて出そうになった。
言葉に出なかったけれども、顔には出ていたらしい。
海江田くんは失笑しながら、私の頭に付いていた葉っぱを道端に捨てた。
「……部活は？」
ヨリの情報によると、海江田くんは春斗先輩と同じサッカー部の筈だった。
それに今日は部活がある日ではないのか。
「休み」

「……そう」
呆気なく返事され、私は躊躇した。
このまま話を続けた方がいいのか、逃げてしまえばいいのか。
だが、特に共通の話題も見つからず押し黙っていると、海江田くんの方から話しかけてきた。
思えば――どうして海江田くんはいきなり私との距離を縮めてきたんだろう。
いつも私が危ない目になると海江田くんはまるで事前に知っているようで、何らかをして事故を防いでくれる。
「俺の事、覚えててくれたんだ」
嬉しそうに微笑する海江田くんに少しだけ恐怖を感じる。
ずるりと背中を這うような、冷たい感覚が走っていく。
「もちろん。だって海江田くん有名でしょ？」
平然を装いながらも私は内心、この街路樹から逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

「そっか」
無邪気に微笑む海江田くんの表情を伺って、私は意を決した。
変人とか、狂人だとか思われるかもしれなかったが、何より私は知りたい事がたくさんある。
「海江田くん、さ。今日、私達に席からどけって言ったのは海江田くんなの？今もこの樹が倒れてくる事を知ってたから私のあとをついてきてたの？他にも不思議に思うのがたくさんあるんだよ」
風が止んだ。
「もしも俺が……未来が読めるって言ったら笑う？」
ぽつりと呟いた海江田くんの言葉に私の身体全身が粟立った。

車椅子のカリンちゃん

看護師さんに手を引かれて病室へ向かう間、不安が怒涛のように押し寄せてきていた。
母は医者の説明を受けた後から来ると言っていたが、このままもう二度と目の前に現れないんじゃないかと想像して怖くなった。

どうやら一ヶ月程入院する羽目になりそうだ。
昨日行われた8歳の誕生日も、この持病の所為で台無しになってしまった。
「ここよ」
看護師さんに笑顔を向けられて少しだけ安心した。
「ここ？」
「和輝くんは今日からここで過ごすの」
１１５号室。病院特有の鼻を突くような香りのするこの場所が第二の家になった瞬間だった。
「何も心配しなくていいからね。同室には和輝くんと同じ年の女の子もいるからね」
看護師さんの気遣うような視線を受けながら、ちぇっ、と心の中で舌打ちした。
女の子か。サッカーができない生き物だし、ボールが当たったらすぐに泣くし、嫌だな。

「あれ？新しい子？」
清潔そうな白いベッドの上にいた少女は手元にあった本から顔を上げて、驚いたように僕を凝視する。

白い頬はマシュマロでふわふわの髪の毛は綿飴みたいだった。
女の子ってお菓子で出来てるのか、と妙に関心した。
「そうよ。和輝くんっていうの」
看護師さんに軽く背中を押され、僕は一歩前に出た。
「……よろしく」
照れ臭かったけれど、いつも両親は五月蝿いくらいに挨拶はちゃんとしろと言うものだから一応言った。
女の子は飛び切りの笑顔を僕に向ける。
「よろしく。私は花梨。仲良くしてね」

そして彼女が相好を崩さぬまま、言うのだ。

「ねぇ、あなたも一回死んでみたの？」

無邪気な笑みでそう問いかけてきた少女の両足は膝から下がなかった。

嘘は雷と共に落ちていく

「私の事、馬鹿だって思ってるんでしょ」
私は海江田くんを睨み上げ、低い声でそう呟いた。
顔よし、愛想よし、頭よし、運動神経よし。男女問わず人気を集めていて模範少年な海江田和輝くんは性格はとてつもなく悪いらしい。
海江田くんは困惑したように微笑すると肩をすくめた。
「だって聞いてきたのは佐々木だろ」
海江田くんの仕草ひとつひとつが苛立ちに変わっていく。
からかわれている――。
「さよなら！助けてくれてありがと！」
怒りを含んだ言葉を投げつけて、私は苛立ちを隠しきれずに踵を返した。
私と海江田くんをそれまで唖然と見つめていた、チェーンソーで樹を切り倒していた中年の男がはっと目を瞬かせて私に道を譲ってくれた。
そして海江田くんが私を追いかけてくることはなかった。

翌日。
「ねえ」
「ん？」
教室でお菓子をむしゃむしゃ食べているヨリに、私は頬杖をつきながら声をかけてみた。
「もしも男の子が突然、未来が見えるんだーって言ったら――それ、信じる？」
お菓子を食べていた手を止め、ヨリは何言ってんの？と言わんばか

りの眼差しを私に向けてくる。
でもヨリはヨリで真剣に考えてくれているらしく、しばらく視線を逡巡と動かしていたけれど、やがて私の目で止まった。
「信じないね、やっぱ。あ、でも人によるかな」
「クラスメイトの男の子だったら？」
「信じないね」
「彼氏だったら？」
「信じるね」
単純なヨリの返事に私は微笑して溜息を吐く。
普通に考えて未来が読める等、そんな非科学的な事はありえない。
真剣に考えていた私はやっぱり馬鹿だ――自分自身に呆れていると、
「佐々木」と呼びかけられて私の神経が尖った。
背の低い、でも高校生の男子は何が楽しいのか私の傍に立っていた。
「何？何なの？また窓ガラスが割れるなんて事言わないでよ？」
冗談半分に笑って言ったヨリだけれど、私は微塵も笑えなかった。
この男子も海江田の手先か――。
「何か、昼休み中庭に行かない方がいいらしいよ」
男子はそう言って、にっこりと眩しいくらいの笑顔を顔にはりつけた。

その日の昼休み、中庭に落雷した。

“未来が読めるって言ったら、笑う？”
そんな、そんな非科学的な事あるわけがない。

ビニール傘下のふたり

誰もいなくなった放課後。
その日、日直だった私は日誌を書いていた為に遅くなってしまった。
外はざあざあと雨が降っている。
下駄箱を開けてローファーに履きかえた。
生憎、天気予報を見ていなかったから傘を持ってきていない。
鞄を抱きしめて昇降口の壁にべったりと張り付いて少しの間、雨宿りしようと考えた。
私がもたれる壁のすぐ近くに銀の糸をひくカタツムリがとまっていた。
ざあざあと雨が地に叩きつけられる。
私はぼうっとして雨雲を見つめていたら、隣に誰かの気配を感じた。
はっとしてそちらに視線を動かすと、彼は傘立てに残っていた一本のビニール傘を躊躇いもなく引き抜き、私に差し出した。
「何これ」
そう眉をしかめて呟くと、彼は困ったように微笑んだ。
「黙って受け取ればいいのに」
「だって、これ、私の傘じゃない」
断固として傘を受け取ろうとしない私に彼――海江田和輝くんは苦笑を滲ませて傘をゆっくりと広げた。
「一緒に帰ろう」
「……」
私が言葉を濁していると海江田くんは何の躊躇もなく私の肩を引き寄せる。
きゅっと唇を引き結び、私は逆らう事を諦めた。
壁に張り付いていたカタツムリに嘲笑されているような気がした。

小さな傘の下で身を寄せ合う私達は傍から見れば恋人同士だったのかもしれない。
だけれど、私達は恋人でも友人でもましてや知り合いでもない。
ただの、隣のクラスの誰かさん程度なのだ。
振り続ける雨は彼の、色素の薄い髪、肩、オールスターの靴等を右側だけ濡らしていく。
ビニール傘は主人ではなく、よそ者の私だけを守り続けていた。
中途半端に肩まで伸びた黒髪、制服のブラウス、チェックのスカート。ローファーは濡れていない。
どうして今まで私を避けるように過ごしていた海江田くんは突然最近になって距離を縮めてきたのだろうか。
そんな疑問を抱きながら私はそっと海江田くんを見上げた。
繊細な顔をした彼は澄んだ瞳でまっすぐ前を見つめていた。

家の場所等、海江田くんに言った覚えもないのに彼は確かに私の家の方向へと足を運んでいた。
どうして。
家に辿り着くまで、安物のビニール傘は驚くほど左に傾き、主人である彼を雨にさらしていた。

赤いスポーツカーは死なせてくれない

「ねぇ、あなたも一回死んでみたの？」

背筋がぞっとした。

眩しいほどの無邪気な笑顔とその言葉が合わなかった。

「か、花梨ちゃん！」

それまで俺の手を引いてくれていた看護師さんはぎょっとしたように少女の名を呼んだ。

まだ幼い少女に怯えている大人が何とも奇妙に俺の目に焼きついたのだった。

花梨、と名乗ったその少女は可愛らしい容姿をしていた。

毛先は綺麗にカールして二重のぱっちりお目目、可憐な少女は花梨という名が凄く似合っていると思った。

病室で花梨と二人きりになる。

僕はなるべく花梨と目を合わさないようにして白いベッドによじ登る。

「あなた、病気なの」

「……うん」

「どれくらい入院するの？」

「わかんない」

「そう」

母親から渡された絵本を開き、それを読むことに集中しようとしたが、花梨はまだ喋り足りないらしかった。

年齢の割にどこか老成した雰囲気を持つ少女に恐怖を抱かなかっ

たといえば嘘になる。
「私はね、死んだらどうなるのかなって思ったの。だから近所の駐車場に停まってた赤いスポーツカーの下に隠れてたらタイヤに足を取られちゃった」
猫踏んじゃった、みたいなニュアンスで笑う少女に僕はやはり恐怖を感じたが、それと同時に興味も湧いてきて、少女を見つめたまま絵本を閉じた。

夢でありませんように

「ふふふ」
朝から気味の悪い笑みを浮かべているヨリに嫌な予感を覚える。
「私に感謝しなさい、マイフレンド。今週の日曜日、Wデートよ！」
ますます嫌な予感を感じながら私は「へぇ……」と呟きながら引きつり笑みを返した。
するとヨリは眉間に皺を刻み込み、驚くべき事を言ったのだった。
「何言ってんのよ。理沙も行くのよ」
「え、ええ！？嘘でしょ！？私、彼氏いないじゃん！」
「ふふふ」
「……何で笑ってるの」
含み笑いで、やらしい眼差しを向けてくるよヨリの睨み返す。
気味が悪い。
背筋に虫が這うが如き、ざわざわとした不快感を覚える。
「何と！そのメンバーは私と彼氏と、あんたと春斗先輩でーす！」
「ええっ！？」
ありえない。
にやにやと気持ち悪い笑みをはり付けながら、ヨリは何度も何度も頷いてる。
私は完全に逃げ腰になっていて、椅子から崩れ落ちないように必死に机の端につかまっていた。
ヨリは胸下で切りそろえられた黒髪を指先で巻きつけながら、こんな事を言った。
「実は私の彼氏が春斗先輩と仲良いんだな」
その事実は私にとって嬉しいと感じるよりも胸中、複雑な思いでい

っぱいだった。
「私、そんな事頼んでない！」
日曜日って明後日だ。
「そんな急に言われても私にも予定ってもんが……」
「あるの？」
疑いをかけられ、私はウッと言葉に詰まる。
そして自問自答を繰り返す。
私は、春斗先輩と仲良くなりたくないのか？
「な、ないけど……」
「よかった！じゃあ、決まり！可愛い服着て来な！」
私以上に浮き足立っているヨリを横目に溜息を吐き出した。
「あ！春斗先輩は女の子らしい格好が好きなんだって」
振り返り際に思い出したように言ってきたヨリの眼差しに、もう泣きたくなる。
でも。
――でも、私は心の隅で願っていた。
夢でありませんように、と。

あなたとはお友達ですらないんですけど

右を向けば、ピンクのフレアのスカート。
左を向けば、白レースのブラウス。
前を向けば、イレギュラー裾のワンピース。
そして後ろを向けば――…爽やかな笑顔が私を迎えている。
「……どうして海江田くんが、ここにいるの？」
春斗先輩を含めたWデートを明日に控え、その日に着ていく服を買いにきた私。
何故、そのストーカー紛いな男がここにいるのか激しい疑問を感じた。
「何となく？」
「何となくでこの店入らないよ。女の子の服の店に男入って恥ずかしくない？」
「別に」
「ほら、みんなチラチラ見てるよ」
「もう慣れっこ」
……そうだろうな。
嫌な女にはなりたくなかったから口を突いて出て来そうになった言葉を慌てて終う。
学校でも海江田くんが歩くたび、足許に花が咲いていくが如き、生徒たちの目を奪っている。
そして土曜日の私服もおしゃれな事に少し苛立った。
「それ、買うの？」
私が持つカゴの中を覗き込み、海江田くんは花柄のキャミソールを摘み上げた。
「明日のデートの為？」

唐突に紡がれた言葉にハッとして海江田くんを凝視する。
「何で知ってんの？」
「言ったじゃん。俺、未来が見えるって」
いつもにこにこと笑っている海江田くんは珍しく真剣な目で私を見つめてきた。
その色素の薄いブラウンの瞳に吸い込まれそうになる。
だけど鼻から笑い飛ばして、私は海江田くんを一瞥した。
「信じないって言ってるでしょ」
私のその言葉に海江田くんは微笑したまま、悲しそうに目を伏せた。

フレアのスカート、サーモンピンクのアウター、花柄のキャミソールを持ってレジに向かうとお金を払う際、店員の女の人が私の隣にいた海江田くんを指差して、「本日、カップルデーとさせて頂いてます。もれなくカップルで来店されたお客様には商品３０パーセント引きにさせていただいております」と痛いほどの笑顔で言ってきた。
恐る恐る海江田くんに視線を送ると、彼は何が楽しいのかにこにこ笑っていた。
カップルじゃないけど、３０パーセント引きというのは中々の魅力だ。

服の入った紙袋を提げ、店内から出ると海江田くんも何故か着いてくる。
「……何？」
「何って？」
「何で着いてきてるの」
私、海江田くんと一緒にいたら、「何？」しか言ってないような気がする。
「腹減った。あそこの店で一緒に食べない？」
そう言って海江田くんが指差したのは、小さいけど可愛い店だった。

世界で一番キレイなお花畑

「死んだらお花畑を見るんだって。知ってる？」
「あ、うん……」
大きな目で僕を見つめる花梨に、心あらずな頷きを返すと彼女は満足そうに頷いた。
そして病室から見える窓の外を恍惚と眺めながら、呟いた。
「見てみたいなぁと思ったの。死んだらどうなるんだろうっていう興味も一緒にね」
「赤いスポーツカーに轢かれた時……見れた？」
恐る恐るそう訊ねると、彼女は細い眉尻をたらして苦笑した。
「見れなかった。三途の川さえ渡らなかった。もしお花畑を見つけたら、色んな花を摘んでママへのお土産にしようと思ってたのに」
僕は花梨の残念そうに紡がれた言葉に疑問を持った。
「死んだら、もう二度と目覚めないんだよ？」
僕も幼い頃、人が死ぬことに言葉にならない恐怖を抱いたものだ。
神様という生き物に一瞬恨みを持った。
「馬鹿ね。それは大人が子供を脅してるだけなの。本当は死んでも生き返る事ができるのよ？あなた、気づかなかったの？」
花梨はクスクス笑いながら、その大きな目で僕を見つめた。
カールがかかったふわふわの髪の毛が、窓から流れ込む風に靡いてふわりと揺れた。

僕は思わぬ知恵に目を瞬かせる。
死んだら生き返る？そんな馬鹿な。
花梨が検査の為に病室から出て行った後、僕はお見舞いに来ていた父に尋ねてみた。

「人って、死んでも生き返ることができるの？」
真夏だというのにスーツを着た父は僕の言葉に一瞬驚いたような顔を浮かべて、僕を見つめた。
それからフッと優しく微笑み、僕の髪をその大きな手ですくう。
「できるかもしれないね」

海江田和輝くんの予言

「死んだら花畑を見るんだって。知ってる？」
食事中、突然そんな事を言い出した海江田くんに私は眉間に皺を寄せる。
フォークで刺したサラダを口に運ぶのをやめて、海江田くんを凝視した。
「聞いたことは、ある、けど……。何いきなり」
死に関連する話などを食事中にされると、あまり気分の良いものではない。
「とても綺麗な花畑、見てみたいとか思わない？」
「思わない。死ぬの嫌だもん」
淡々として答えると、海江田くんは何が可笑しいのか失笑していた。
昼食を奢ってくれるという誘いにのって、こうして食事を共にしているが、浅はかだったと後悔する。
食べ物でつれた、食い意地のはった女だと思われるのが嫌だった。
海江田くんも春斗先輩も同じサッカー部だから、春斗先輩の耳に入ったらどうしようと思った。
そんな事を悶々として考え込んでいると、海江田くんは犬っぽい笑みで私を眺める。
店内に流れる、女性シンガーの透明感ある歌声がこのときの私には酷く煩わしいものだった。
「佐々木はどうして春斗先輩が好きなの？」
「え……っ！？」
なんで知っているんだろう。
そう困惑しつつも、私は恋心がバレたことに激しく動揺していた。
これはただの自惚れかもしれないけれど――…海江田くんはもしか

したら私が好きなのでは？
勘違い甚だしいと思われても仕方がないが、それしか思い浮かばない。
それで私の言動をすべてチェックしている為、明日Ｗデートがあることも知っているのだろう。
何なんだ、こいつは。
ぞっと、背筋に虫が這うが如く、悪寒を覚えた。
「信用してよ」
海江田くんは頬杖をついてにっこり笑う。
答えられない私に、海江田くんは視線を彷徨わせ、この店のウィンドウの向こうを指差した。
向かい側の店の前に、うさぎの着ぐるみが色とりどりの風船を片手に小さい子供達に手渡していた。

「１３時２４分４８秒にあのうさぎが持つ風船がすべて空に飛んでいく。そして雨が降り出す」
海江田くんの予言に私は思わず腕時計で時刻を確認した。
――現在、１３時２４分２２秒。
流れるように動く秒針を食い入るように見つめる。
もしも、うさぎが風船を放してしまったら、私は海江田くんの未来が見えるという事実を信じる事になる。
「あと１０秒」
海江田くんの楽しそうなカウントダウンを聞きながら、外にいるうさぎの着ぐるみを見つめた。
「――…５、４、３、２」
いち……。
風船は、空に舞い上がらなかった。
時刻は１３時２５分２０秒を過ぎた。
うさぎの着ぐるみは平然とその場にいて風船を決して放さなかった。
私は怒りで瞼が赤くなっていくのを感じ、勢いよく椅子から立ち上

がった。
雨も降り出さない。
「……信じた私が馬鹿だった」
そう呟くと海江田くんは焦ったように顔色を変え、腕時計を見つめる。
「そ、そんな！確かに俺は……」
「私が馬鹿だった！人をからかって楽しい！？帰る！！」
憤りで何も考えられなくなり、私は鞄の中を探り、財布から千円札を取り出し、テーブルに叩き付けた。
「ま、待って！」
慌てて海江田くんが私の後を追ってこようとする気配を感じる。
「た、確かにそういう未来が見えたんだ！」
馬鹿。馬鹿。馬鹿。私は大馬鹿者だ。
店から出たところで私は海江田くんに腕をつかまれ、身体を反転させられた。
「もう一つ予言する」
彼はいつもみたいにニコニコ笑うのではなく、真剣な目で私を見つめる。
「明日、１９時１１分５２秒春斗先輩が死ぬ」
私は海江田くんの手を振りほどき、空いた手で彼の頬を思い切り殴った。
彼は驚いたように頬を押さえ、私を目視する。
「……っ、最低」
涙を滲ませ、そう吐き捨てると、私は踵を返した。
訳もなく走った。
人々の間を掻き分けて意味もなく、走って走って、走り続けた。

タカシナハルト先輩との15分

「かわいいね」
「えっ」

――プレイバックする。
空を見上げれば、目が痛いほど蒼く澄み切っている。
夏なのにそのくせ、暑くはなく、ひんやりとした風が私を包み込む。
そんな日曜日の朝十時、偶然にも海江田くんと会った商店街の時計台の下で待ち合わせ。
九時四十五分に到着した私よりも早く、時計台の下に春斗先輩が待っていた。
黒光りする携帯電話の液晶画面を見つめながら、眉間に皺をよせている春斗先輩は少し不機嫌そうで私は声をかけるべきか気づかないふりをするか悩んだ。
茫然と立ち尽くしていると、春斗先輩はふいに液晶画面から視線を上げて、私を見た。
「理沙ちゃん？」
「あ、はい」
どうして名前を……と思ったら、おそらくヨリが約束を取り付ける際に教えたのだろうと察した。
「かわいいね」
「えっ」
品定めするように私の姿を見つめ、春斗先輩は口角を上げた。
携帯電話をジーンズのポケットに滑り込ませ、私の目を見る。
「そのスカート」
なんだ、と思った。

思わず見下ろすと、昨日購入したフレアスカートが風に揺れていた。
それがどこか勝ち誇っているようで、私は苛立った。

「理沙ちゃん、俺の名前知ってる？」
知らないわけがない。
言葉には出さなかったけれど、ずっとあなたの名前を呟いてた。
高校の廊下ですれ違う時は私の姿なんて目にも留めない彼が、今私の目の前で微笑んでいるという事が不遜な表現かもしれないけど幸せに感じる。
「高階。高階春斗だから覚えててね」
「はい」
しっかり頷くと、春斗先輩は笑みを深めた。
「素直だなぁ。心が清いって感じ。1年生と2年生の女の違いがこうもはっきり出る」
独り言のように呟く春斗先輩を見つめる。
？もしも男の子が突然、未来が見えるんだーって言ったら――それ、信じる？？
突然、前に自分が質問した声が脳裏によみがえってきた。
私の問いに対してヨリは何て答えただろうか。
？人によるかな？
私は海江田くんの言葉は信じなかった。
もしも春斗先輩に海江田くんと同じ事を言われたらどう感じるだろうか。
時計の針は丁度、十時をさしていた。

でもやっと知り合いになった感じかな

「ごめーん、待った〜？」
鼻につく甘ったるい声でヨリが参上したのは、待ち合わせ時刻から二十分過ぎた頃だった。
ヨリの爪は、鮮やかな桜色に塗られていて、その手は彼氏の腕に巻きついている。
「いやぁ、ごめんごめん」
ヨリの彼氏とはこれで会うのは二回目だが、相変わらず優しそうな目をしていた。
私と春斗先輩は意外にも他愛もない話で盛り上がっており、そんな待たされている感じはしなかった。

「もっと遅刻して良かったのに。ね？」
春斗先輩にそう同意を求められ、私は少々慌てた。
ね？って……。
答える術が見つからなくて俯くと、先輩は愉快そうにクスクスと笑みをこぼした。
「ちょ、ちょっと」
そんな私と春斗先輩の間を裂くようにして割り込んできたのは、ヨリだった。
だけどヨリの手はヨリの彼氏を掴んでいるから必然的に二人もの人間が挟まってくる。
「どどどどういうこと！？凄く仲良さげな感じじゃない！私がいない間に何があったのよ！」
こそこそと耳打ちしてくるヨリだったが、思ったより声が大きい。
私は苦笑をもらしながら、

「結構お話したよ。でもやっと知り合いになった感じかな」
「充分進歩してるじゃないの！」
まるで自分の事のようになって夢中で話すヨリを見てこういう友人は一人必要だなと感じた。

それから私達四人は、商店街をあてもなく歩いた。
時にゲームセンターに入ったり、時に洋服店に入ったり。
そして十三時をまわろうとしていた頃、春斗先輩が小さなレストランを指差した。
「お腹すいたし、あそこで食べようか。美味しいらしいよ、あの店。前ＴＶに出てたって」
饒舌なヨリの彼氏がそう説明したが、私はあまり乗り気ではなかった。
何故なら、あの店は海江田くんと喧嘩した店だったからだ。

優しい彼と、怒鳴る彼

二日連続で訪れた私を、もちろんこの小さな店は覚えていて、レジにいたお姉さんが私を見て苦笑し、会釈してきた。
だけど私はここで、昨日海江田くんと二人で会ってたなんてヨリに言ったらきっと誤解されると踏んで取りあえず知らないフリを決め込んだ。
「かわいい店ねぇ」
ヨリが店内を見回しながら呟く。
昨日は何だか色んな複雑な気持ちでいっぱいだったけれど、今は幾分穏かな気持ちでいるから、ゆっくり店内やメニューを見ることができた。
まぁ、隣に春斗先輩が座っていることには慣れないけど。
「……春斗？」
はっと我にかえると、注文を取りにやってきたウェイトレスのお姉さんが驚いたように春斗先輩を見つめていた。
「由香……」
春斗先輩は驚くというよりも焦っているような感じで由香と呼んだウェイトレスを見つめ返す。
由香？誰。
ヨリは野次馬根性を隠し切れず表情に出ているけど、それでも私の事を考えてくれているらしく、ちらちらと心配を孕ませた視線をよこしてきた。
「どうしてここに……。もう新しい彼女できたのね。相変わらずね」
最初は驚きを滲ませていた由香だが、春斗先輩の奥にいる私をじろりと一瞥し、溜息を吐いた。
「お前に関係ないだろ」

焦燥を露にしている春斗先輩が、さっきまでの明るく優しい彼と同一人物だとは思えなかった。
眉間に皺を刻み、テーブルの下で片足を貧乏揺すり。
――こんな噂を聞いたことがある。
春斗先輩は複数の女の人と肉体関係を持っているどうしようもない男だと。
初め、ヨリにも一度だけ警告されたが、それでもいいと頷いた私。
春斗先輩が、好き。
それだけは拭いきれない真実。
「関係ないですって？」
眉を吊り上げる彼女に、
「うるせぇんだよ！早く注文とれ！」
春斗先輩は人が変わったように、怒鳴りつけた。
由香はその罵声に肩を震わせ、口を閉じてしまった。
「お、おい、春斗……」
ヨリの彼氏がなだめるように声をかけると、春斗先輩は弾かれたように私に振り返った。
きっとそのときの私は酷い顔をしていたに違いない。
「ご、ごめん。びっくりさせた？でも、この女とはもう関係ないから」
理沙ちゃん、と優しく呼ぶ彼。
私は別に春斗先輩の彼女でもなんでもないのに、まるで恋人のように優しく言葉をかけてくれる。
由香って人が誤解してしまうのではないかと冷や冷やした。
「だ、大丈夫です」
私がそう答えている背景でヨリの彼氏が全員分の食事を注文してくれていた。
私は何度か学校で春斗先輩が女の子にこうやって怒鳴っている場面を何度か見たことがある。
春斗先輩。

一体どっちが本当の春斗先輩なの？

生を恐れる幼き少女

今朝、花梨の泣き喚く声で目が覚めた。
「や、やだ！！いやっ！放してよっ！！」
何事かとベッドから飛び起きた僕に、看護師さんたち数人が優しい笑みを返してくれる。
「ごめんね、和輝くん」
何だ……？
「行きたくないっ！！」
悲鳴に近い言葉をあげる花梨に視線を動かす。花梨は綿飴のようなふわふわの髪を振り乱して、必死にベッドの柱に捕まっていた。
困惑したように頭の禿げた白衣のおじさんが必死に花梨を宥めていた。
「花梨ちゃん、手術しないと危険なんだよ。またいつ発作が出るのか分からない」
「でも嫌なのっ！」
涙でぐしゃぐしゃになった花梨はキッと、傍に立つ背の高い女の人を見上げる。
きっと花梨の母親だろうと僕は察した。
猫を連想させるような、目尻が少しつりあがったアーモンド形の猫目が花梨と似ていた。
「ま、ママ！ねえ、この人達に言って！私は大丈夫だって！！お願い、ママ！」
花梨の母親は涙を耐えるように俯き、嗚咽がもれないように口許を押さえる。

「先生、この子が助かるなら構いませんから……」
花梨の母親の肩を引き寄せたのは、ワインのラベルになっているような彫りの深い顔立ちをした男だった。
花梨の母親のようにあまり若くはない。四十代ぐらいだろうか。
きっと、花梨の父親だ。
「わかりました」
禿げた医者はしっかりと頷き、男の看護師さんに何かの支持をしていた。
「やだ、放して！」
男の看護師さんは花梨の身体を抱え、車椅子に座らせる。
花梨はジタバタと暴れていたが、多くの人たちに押さえられ、動きを停止させられていた。
花梨の膝にかけられた毛布が露になり、膝から下のない足が現れた。
僕はそれが直視できず、ただ目の前の凄まじい出来事に身体を震わせた。

「行きたくないっ！」
花梨の意思を無視して、車椅子がゆっくりと押される。
ふと花梨は僕と目が合い、すがるような視線を向けてきた。
地獄に落とされたような悲痛な面持ちをした花梨は何かを言う代わりに僕の方へ右手をまっすぐ伸ばしてきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8480u/

隣のクラスの海江田くん。

2011年8月5日11時48分発行